

辻 秀一

つじ・しゅういち ●1961年生まれ。北海道大学医学部卒。スポーツ医学とスポーツ心理学をもとにスポーツチームや企業のメンタルトレーニングを行う。エミネクロス代表。(http://www.eminecross.com)



組織ではみんなが一つの目標を共有することが大切とよく言われます。もちろんそれは大事ですが、目標達成のためにメンバー一人ひとりが自分がどんな役割を果たすべきかを認識し、それを懸命に果たすことが大切だと全員で理解している組織は意外に少ないものです。東大男子ラクロス部はその少ないものの一つといえます。部員約一〇〇名の大所帯ですが、個々がまず自分の機嫌は自分で取るという自己責任を基盤に、それぞれの役割徹底のためのシステムとコミュニケーションが存在します。

組織は個々の人間のしつかりとした感情コントロールという自己責任でできあがるという話を前回しました。今回は「個々が役割を認識しそれを果たす」という一見当たり前のことを徹底できている集団は間違いなく強いという話をします。私がメンタルトレーニングをしているチームのなかに、この当たり前のことをやり遂げて成功しているチームがあります。東京大学の男子ラクロス部です。大学の特性上、強化選手などを迎えられない環境のなか、関東大学リーグの一部で見事優勝し、二〇〇五年全日本選手権でも準優勝という輝かしい結果を残しています。このチームの強さの秘密を紹介することで、読者のビジネスのヒントにしてみたいと思います。

連載② メンバーが自分の役割を知るチームは強い

「縦横」の「コミュニケーション」

東大男子ラクロス部が異色なのは、「横の組織」と「縦の組織」があることです。通常であれば、四年生なら四年生、三年生なら三年生……といった学年ごと、もしくはAチーム（一軍）、Bチーム（二軍）、Cチーム（三軍）という横のつながりで連携をとりがちですが、



東大男子ラクロス部のメンバー達

そこに「縦」のコミュニケーションを意図的に加えているのです。簡単にいえば、在籍する四年生の人数分の縦のグループを作り、そこに一年生から三年生までの六、七人が縦断的に参加するというものです。現在、一五個ある縦のグループでは例えば、「みんなが練習場所に毎日真っ先に到着し、チーム内に活気を呼び込もう」とい

った、自分たちで設定した目標に沿って行動しています。通常のミーティング以外にも、定期的はこの縦のグループで集まります。縦横のコミュニケーションを設けることで組織の強化を図っています。

実はこうした工夫があることで、各部門が自己の役割を認識し、それを実行できているのです。横のグループだけでは、どうしても

三軍の控え選手や下級生の発言の機会は抑えられがちです。

しかし、レギュラーも控え選手も、あるいは上級生も下級生も一緒になってチーム全体のために何をすべきかを考える縦のグループ内であれば、たとえ目立たない一年生の意見であってもみんなが耳を傾けます。メンバーはそのなかで自分の必要性を見出すとともに、責任を全うすることでチームに貢献する喜びを知ります。

そんなイメージのシステムが大学の体育会チームに存在しているわけです。昨年は学生チャンピオン、そして全日本準優勝でしたが、今年度はさらに上の目標である日本一を目指しています。カリスマ監督やプロのコーチがいないなかで、全員で創り上げていく過程が今まさにここにあります。現在は関東リーグ戦の最中ですが、この雑誌が発刊されるころには、学生チャンピオン二連覇、日本選手権に向けて最高のチーム強化に励んでいると思います。時間があれば、ぜひ大会会場に足を運び応援してください。